

シトラス色のありがとう

シトラス(薄緑)色のリボンを体に付けるシトラスリボンプロジェクトが全国に広がっている。新型コロナウイルスに感染した人や医療従事者たちへエールと感謝の気持ちを伝え「私は差別や偏見に反対です」との思いをアピールする運動だ。戸田市ではガールスカウトの小中高校生ら約40人が小さなシトラスリボンを付けたメッセージカード600枚を作成。代表の中学生6人が9日、同市本町の戸田中央総合病院を訪れ原田容治院長(71)に手渡した。

「いのちを助けてくれてありがとう」「コロナに負けないでがんばって」「医療従事者のみなさんはたいへんなのに、ありがとう」など書いた名刺サイズのメッセージカードに小さなリボンが付いていた。文字は同スカウトの小学生たちが書き、中高生たちがリボンを織り上げた。

原田院長は「本当にありがとう。メッセージを読んで涙が出る。心に刻んで頑張っていきます」とあいさ



シトラスリボンの贈呈を受けた戸田中央医科グループの中村隆俊会長(中央)。後列にガールスカウトの中学生たち。右端に原田容治院長。戸田市

戸田のガールスカウト 病院にリボン贈る

つ。同団の育成会長で、同病院を運営する戸田中央医科グループの中村隆俊会長(92)も中学生たちを出迎え「ありがとう。これからもしっかり頑張ります」とお礼の言葉を述べた。

ガールスカウトは戸田と蕨市民の埼玉県第18団。団委員長の間泰子さん(75)は「リボンは子どもたちからの感謝の気持ちです」とあいさつ。

戸田喜沢中1年の掛川せりさんは「病院の人たちに感謝したい」。戸田東中1年の吉田彩乃さんは「私たちのシトラスリボンが喜ばれてうれしい」。同1年の奈良崎舞さんは「早くコロナが収まってほしい」と話

した。

シトラスリボンプロジェクトは松山市が発祥の地で、松山大学法学部准教授の甲斐朋香さんら有志が始めた。

コロナ感染から回復した人が帰宅して地域のいわれなき偏見に傷ついたり、医療従事者やその家族への偏見や差別があることを知った甲斐さんらが考えた活動。リボンを付けることで「私はあなたの味方です」という気持ちを無言でアピールする。

リボンは昔から伝わる水引の技法でひもを組んで作る。三つの輪は地域、家庭、職場(学校)を表すという。